伴走者ための共学共創コミュニティ
Accompanied Community

心のエンジンが駆動する、探究学習の場面集。

A collection of inquiry learning scenes that drive the engine of the mind.

Be Excited

高校生篇
Vol.2

新たな価値は、若者が探せる

若者が見出した価値の良し悪しを、判断するのは難しい。
大人の自分の中にある「価値」が簡単に言葉にできるならば、
それはすでに古い価値かもしれない。

大人は、誰かが「答え」を持っていると思いがちだ。
だが、「正しい答え」なんてない。
新たな価値を探す力は、若者のほうがずっと強い。
大人にできることは、創造性にふたをしようとする全てから、若者を守ることだ。
背中を押し、未知を進むための「道具」を授けることだ。

具体的には何ができるか。
「エンジン」が駆動したとき、そこにはどんな「伴走」があったのか。
この冊子に集められた場面たちが、きっとヒントになるはずです。

企画・編集　大野 公寛、中村 怜詞（島根大学）
江森 真矢子、原 周右
特集記事執筆　笹原 風花
場面集執筆　阿部 千穂、石井 香名、入山 寛之
桑田 直子、小林 良典、徳田 憲一郎
前川 修一、眞下 美紀子、吉崎 聡一
（五十音順）

編集・デザイン　サカイデザイン
イラスト　組田 陽子
発行　2024年3月
発行元　島根大学教育学部

人とともに 地域とともに 島根大学 SHIMANE UNIVERSITY

島根大学 教育学部　〒690-8504 島根県松江市西川津町1060　https://www.edu.shimane-u.ac.jp/

本冊子は、一般財団法人三菱みらい育成財団「主体的・協働的な学習を実践できる教員養成・指導者育成プログラム」の助成を受けて発行しています。

心が高鳴る瞬間。

探究の成功事例は真似できません。
同じ道をたどっても、
同じように生徒の心が駆動するかは分からないから。
私たち伴走者に出来るのは、
その場面で最善の関わりを模索すること。

本冊子は、生徒の心が動いた場面集です。
「こんな時、どうすれば?」に
寄り添うヒントをお届けします。

INDEX

高校生の心のエンジンが駆動する場面集

1. 心のエンジン／心の伴走 …… 03
2. 特集1 高校生座談会「私の心に火がついた時」 …… 05
3. 特集2 伴走者座談会「伴走するって何だろう?」 …… 11
4. 16の場面集 …… 17
- 何をしたいのかわからない …… 19
- モチベーションが上がらない …… 23
- 自信がない、不安で動けない …… 27
- 見通しが持てない …… 30

「心のエンジン」

教室に響く、チョークの音、先生の声。
先生から生徒へ、一方向の授業。
まるで、先生の一人舞台。
変わってほしい。だけど、願うだけじゃ変わらない。
なら、私が変えたら良いんじゃない？
私のエンジンは、
日常に潜むちっちゃな違和感と正義だった。
「そんなに簡単なことじゃないよ」って言葉
その時の私には、よく分からなかった。
だって、本気で変えられるって思ってたから。
泥臭くて良い。バカにされても良い。
自分の信じる道を、全力で突き進んでみた。
でも、何も変えられなかった。みんなの言う通りだった。
だけど、「成功」とか「失敗」って言葉じゃ表せないくらい
私の見えてる世界は、変わってるんだ。
だからもっと新しい世界を見てみたい。
その原動力が、きっと次のエンジンなんだと思う。

THE ENGINE
OF THE MIND.

「心の伴走」

学校という、小さな世界で生きていた私。
楽しいこともあるけれど、どこか息苦しくて
大好きな探究さえも、投げ出したくなった時があった。
そんなとき先生は、
「やめてもいい」でも「もう少し、頑張れ」でもなくて
「あなたはどうしたいの？」って私に問いかけた。
正解の道を歩いていくための地図なんて持ってない。
でも先生は、好奇心のコンパスを与えてくれた。
でもね、私のコンパス、
しょっちゅう、向く方向が変わっちゃう。
右か左か、どっちが正しいかなんて分かんない。
コンパスのせいで、遠回りもしたかもしれない。
だけど、一瞬一瞬の選択を重ねた先には
新たな仲間と、ワクワクする未来が待っていた。
一人ぼっちで、暗い霧に囲まれた日もあったよ？
でも、今は違う。
心のそばには先生がいて、
今は場所を超えて仲間たちがいるんだから。

私立 純心女子高等学校　木須さくら

GUIDE BY SIDE

特集 01

高校生座談会 私の心に火がついた時

高校生たちは、いつどんなタイミングで心のエンジンを駆動させ、自ら一歩を踏み出したのでしょうか。そして、どんな壁にぶつかり、それをどう乗り越えたのでしょうか。それぞれのスタイルで探究に取り組む高校生4名に語り合ってもらいました。

最初から探究への意欲はあった？

角：探究への意欲は……なかったです。クラスメイトたちもあまりやる気がなくて、探究では「好きなテーマで好きなようにやっていい」と言われたものの、何をやったらいいかわからない…という感じでした。高校に入学した当初は人前で話すのがめちゃくちゃ苦手で、発表のときはビクビクして怖気づいていましたね。

福岡：やる気はあったんですが、壁にぶつかったときにガクンと落ちてしまって。私は人に悩みを相談するのが苦手で、問題が起きたときにどうしたらいいかわからずに戸惑ってしまいました。

小山：僕はあれこれとアイデアを考えるのが好きで、こんなことできたらいいな、あんなことしてみたいなというイメージは膨らませるものの、実際に行動に移すほどの意欲や行動力がなく、いつも空想で終わっていました。

村山：私は高校1年生の時に病気で入院し、治療で輸血を受けたことをきっかけに、もっと献血を広めたいと思うようになりました。でも、強い思いはあったものの、実際に何をどうすればいいか活動のイメージがわかなくて、自分の中だけに留めていました。

心に火がついたのはどんなとき？

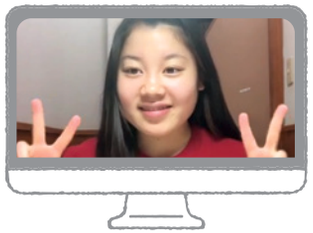
角：昼間アルバイトをしていることもあり最初のうちは「どうしよ～」とか言いながらみんなでタラタラしていたんですが、発表が近づくにつれ、あいつは準備を始めたらしいとか、もうできてるらしいとかいう声が聞こえてくるようになって。ヤバい、俺もせんといかん…とようやくエンジンがかかる…という感じでしたね。でも、なんやかんやいって、みんな期日までには必ず仕上げていました。先生に何か言われてやる気になったというよりは、仲間に引っ張られて動き出せた感じです。

福岡：火がついたのは、ライバルができたときですね。私は、空き家を活用してJKが地域の人たちの「したい」を叶える場づくりに取り組んでいるのですが、同じ空き家を利活用して地域を盛り上げようという大人たちが出てきて。私は授業や部活があり毎日は時間を割けないなか、大人たちは時間も労力も注げて経験値もあって…。「大人たちに負けたくない！がんばる！」と逆に燃えましたね。

村山：心が動いたタイミングはいくつかあるんですが、最初は、「全国高校生マイプロジェクトアワード」（マイプロ）を知ったときです。保健室で休んでいるときに阿部先生と話をするなかで、献血を広めたいと思っていること、でも具体的なやり方がわからないことを伝えると、マイプロとして挑戦してみたらと提案されたんです。ずっとモヤモヤしていたので、「これだ！やってみたい！」と視界が開けた感じがしました。また、先日、ついにマイプロジェクトアワードに参加したのですが、他の人たちのプレゼンに圧倒されて、すっかり自信をなくしてしまって。そんなときに、仲間が「ここまでがんばってきたんだから、大丈夫」と言ってくれて、そうだよな、ここで自信なくしてる場合じゃないよなと、気持ちに火がつきました。

小山：心に火がついたというか、テンションがわーっと上がったのは、自分が企画したイベントの本番です。どれくらいの人が来てくれるかわからず、めちゃくちゃ不安だったんですが、開場すると

角 知拓 さん
福岡県立ありあけ新世高等学校 定時制課程4年



福岡 沙羅さん
島根県立隠岐島前高等学校2年

村山 茉優さん
山形県立寒河江高等学校2年

小山 真嗣さん
私立 長崎南山高等学校3年

※学年は取材時

ゾロゾロと参加者が集まってきてくれて。それを見たら気持ちが高揚してきて、「やるしかない！」と気合いが入りましたね。

壁にぶつかったときはどうした？

福岡：私が進めているプロジェクトでは、空き家を管理する大人たちとの交渉やすり合わせがキモになるのですが、大人の迫力に負けてしまって自分の意見が言えない…という時期がありました。活動を始めた頃は、大人たちは私の意見に対して否定的で非協力的だと感じ、認識のすれ違いから関係がこじれかけました。そんなときにコーディネーターの石井さんに言われたのが、「自分の意見を言わないと、何がしたいのかが相手に伝わらないよ。相手もどうしたらいいかわからないよ」ということでした。

それから自分の意見を積極的に伝えて話し合いをするようにしたら、相手はできる範囲で応援するという姿勢でいることがわかって、自分が何をしたいのかを言わないと逆に困らせてしまうのだと実感しました。

小山：福岡さんのケースと似ているんですが、僕も年上の大人に自分の意見や思いを伝えるときに、壁を感じました。イベントの開催場所を確保するために許可が必要だったので、地域の重鎮が集まる会議でプレゼンをしなくちゃいけなくて。何を言われるだろうかとすごく怖くて、思うように熱意を伝えきれなくて意気消沈していたのですが、予想以上に地域の方々が応援してくれてありがたかったです。

この活動は学校の探究とは別にやっていたので、先生には特に相談はせず、地域関係の仕事をしている母に悩みを聞いてもらっていました。母や地域の方々のサポートがあったから、乗り越えられたのだと思います。

角 知拓さんの探究

自分の興味関心を深掘り発表

総合的な探究の時間では、自分の好きなことや興味のあること、将来のことなど、自分が今考えていることを深め、最終発表会に向けて言語化していきました。僕は、1年次は「アドラー心理学」、2年次は「アンガーマネジメント」、3年次は「恋と愛」、4年次は「ギャルマインド」をテーマに選び、そこを起点に視野を広げたり本質を掘り下げたりして、考えたことをまとめていきました。

村山：私はまさに今、壁と向き合っているところです。若年層向けの献血推進ワークショップを開催し、そこで使ったボードゲームの商品化を考えているのですが、資金源に困っています。

でも、阿部先生に市の助成金を調べてみたらとアイデアをもらったり、ワークショップの参加者に学校教育関係の助成金を扱っている方がいたりと、壁を打ち破るヒントが見つかりそうです。自分のアクションが後につながることもあるんだなと思いました。

福岡さんの話にもあったように、自分が考えていることややりたいことは、自分から発信しない限り伝わりません。最初のきっかけも含めて、私がアクションを起こせたのは、そしてたくさんの人の協力が得られたのは、「やりたい」を周りの人に伝えたから。

言霊ではないですが、やっぱり言葉にして伝えることって大事なんだと実感しました。

何がモチベーションになっていた？

村山：たくさんの人に貴重な時間を割いて協力してもらっているので、期待に応えられるように頑張ろうというのが、モチベーションになっています。また、自分が入院していた小児病棟で幼い子たちが治療を受けている姿を見てきたので、自分の活動はこういう子たちを助けるためでもあるんだと思うことも、モチベーションになっています。

小山：僕も、関わってくれた方がたくさんいるんだから、やるからには成功させたいという思いが強かったです。責任感がモチベーションになっていました。また、参加者の笑顔が何よりうれしいので、それを想像して気持ちを高めていました。

角：探究の活動って、社会に出たときにいろんなシーンで役に立つと思うので、目の前にある課題を乗り越えた先に何が得られるかをイメージするように

福岡沙羅さんの探究

JKが地域の「したい」を叶える場作り

地域共創科の「暮らし・交流ゼミ」に所属し、「みんなの“したい”をかなえる」をテーマに、空き家を活用して地域の方々がやりたいことを実現できる場づくりに取り組んでいます。私の呼びかけに、高校生が18人集まってくれて、一緒に活動しています。地域の大人にもいろんな考え方の人がいて、空き家を管理する大人たちとの話し合いがうまくいかずに苦戦したこともありましたが、現在は第一弾のイベント開催に向けて準備を進めています。

していました。昼間は仕事のため四六時中考えているわけではないのですが、それでも目的意識をもつことで取り組む意味が明確になり、モチベーションが上がりました。

福岡：探究用のノートに、自分がどう感じたか、何を学んだか、課題をどう乗り越えかなどを書くようにしていて、モチベーションが下がったときには、それを見直しています。自分のやってきたことを振り返ることで、「大丈夫」という気持ちになれます。

どんな気づきや変化があった？

角：うちの高校の探究では年に1～2回、外部の方も含めて大勢の人の前で発表したり、「哲学カフェ」というイベントを生徒主体で開いたりする機会があるんですが、そういったことを通して、人前で物怖じをしなくなりました。先ほども言ったように、僕は高校に入学した頃は人と話すことが苦手で、人前ではめちゃくちゃビクビクしていたので、我ながら大きな成長だと思います。

福岡：自分とは違う視点から見られるようになったことと、自分の弱みを知ったことです。空き家の活用法を考えたときに、最初は「自分は何をしたいか」という視点で考えていたのですが、それは自分たちのニーズであって地域のニーズじゃないよね、じゃあ地域のニーズってなんだろう…と違う視点からアイデアを考えられるようになりました。また、先ほど話した「壁」にぶつかったときに、どうして自分の意見を言えないのかを深掘りして見えてきたのが、自分の弱みでした。

「相手にどう思われるかを気にして、自分をよく見せようとしてしまい、本当に言いたいこととは違うことを言ってしまう」という自分の傾向を知ることで、そこを変えていこうと前向きに意識ができるようになりました。

村山茉優さんの探究

若年層に献血を広める

授業外のマイプロジェクトとして、養護教諭の阿部先生に伴走してもらいながら、献血を広める活動に取り組んできました。特に若年層へのアプローチに重点を置き、献血についてのワークショップを企画。探究系の学習塾の方、献血センターの方、日本赤十字社の方、社会福祉協議会の方、東北芸術工科大学の大学生など、先生から外部の方々を紹介してもらい、たくさんの人の協力を得ながら企画を実現することができました。

小山：僕も、自分にはなかった新しい視点が得られました。高齢者と若者の交流イベントを公民館で開催したのですが、「公民館は自宅から遠くて行きづらかった」「若者と一緒にスポーツをしたい」など予想外の意見があり、高齢者の中にもいろんなニーズがあることを改めて実感しました。

村山：私は、自分の中にあっておかしくなかったはずの視点に気づかされました。探究活動を通じて知り合った赤十字社の方の「献血ができない人が悪いわけではまったくない。献血ができなくても、他にできることがあるはず」という言葉を聞いて、ハッとしたんです。私たちの活動は、献血ができる人を前提としていたなと。そして、私自身も輸血を経験しているため献血ができない立場なのに、献血ができない人がいることに全然気づいていなかった、なんで気づかなかったんだろうと。当事者でも気づかないことがあるんだ、という気づきでしたね。

これからのあなたは？

福岡：大学に進学するつもりはなかったのですが、探究に取り組むなかで自分の力不足を実感し、今は大学で学びたいと考えています。

村山：赤十字社の人と関わるようになり、人道支援にも興味をもつようになりました。病気というつらい経験が逆に武器になることがわかったので、自分ならではの視点を今後の進路にも活かしていきたいです。

小山：公民館以外の場所でイベントをするとき、空き家を活用できるかもと考えたことがきっかけで空き家問題に関心をもつようになり、それが進路にもつながりました。大学では地域創生について学びたいと考えています。

角：実は、僕も同じく人口減少と高齢化に悩む地域の活性化について学びたくて、卒業後は大学に進学します。お互い、頑張りたいですね。

小山真嗣さんの探究

授業外でも地域でイベント開催

「商店街の活性化」というゼミテーマのもと、地元のパン屋さんとコラボレーションして限定商品を開発し、商店街のイベントで販売する、という企画を立案。パン屋さんに快く協力していただき、パンはすぐに売り切れる人気ぶりでした。その後、地域の高齢者の「スマホの使い方がわからない」「若者ともっと交流がしたい」という声をもとに、高齢者の方にスマホの使い方を教えながら交流するイベントを授業外で企画・運営しました。

特集02

伴走者座談会 伴走するって何だろう？

マラソンでは、視覚などに障がいがあるランナーには伴走者がつき、適宜必要な情報を提供しながら伴走します。一方、ペースやレース展開を決めるのはあくまでもランナー。伴走者はそれに合わせて走ります。では、高校の探究における伴走者は、生徒にどのように伴走すれば良いのでしょうか。教員やコーディネーターとして生徒の探究学習に伴走してきた4名に語り合ってもらいました。

どんな探究をしているのか？

徳田：長崎南山高校では5年前に総合的な探究の時間を開設し、生徒は6つのゼミに分かれて探究を進めています。プロセスから学ぶことを大事にしており、発表会も成果ではなくプロセスを発表する場としています。私自身は探究のカリキュラムをつくり、かつ、実践する立場にいます。

阿部：私はカリキュラム（授業）としての探究にはほぼノータッチで、保健室に来る生徒が放課後や休み時間に取り組むマイプロジェクトに伴走しています。保健室に来る生徒の気持ちが元気になったらいいなという思いで、抱える悩みの解決策の一つとして、この「保健室探究活動」に取り組んできました。

石井：コーディネーターという立場で、先生と一緒に探究の授業をつくり、生徒に伴走しています。隠岐島前（おきどうぜん）高校では2023年度に地域共創科を開設しました。毎週木曜日は丸ごと1日地域実践にあてる「共創デー」としていて、生徒が地域にどっぷり浸かって学んでいます。地域共創科の生徒は2年生から4つのゼミに分かれて自分のプロジェクトを進めており、私もゼミの一つを担当しています。

前川：私が勤務しているのは定時制課程で、さまざまな背景をもつ生徒が学んでいます。入学時には自己肯定感が低く対人関係も苦手な生徒が多く、探究を通してそこをなんとか上向きにしたいと思って伴走してきました。本校の探究は、いわゆる地域課題探究などとは趣が異なり、自分自身のことやアルバイトで発見した探究課題など自分の興味・関心事を掘り下げていくのが特徴です。

伴走者として心がけていることは？

阿部：私が大事しているのが、生徒の心の動きです。「あ、今、心が動いたな」っていう瞬間があるんですよね。心が動いて、自分でやりたい・やろうという意志が芽生えて初めて一歩踏み出せるものだと思うので、生徒に強制はしないようにしています。

私の役目は、心の動きを誘発すること。何に、どんなときに心が動くのかを、悩みを聞いたりいろんな話をしたりしながら探り、こんなのがあるよ、こんな人がいるよと、ネタを提供しています。心が動く仕掛けはするけど、やるかどうかは自己決定。生徒に委ねています。

前川：伴走者の心得は、生徒を信用することに尽きます。信用して任せる。まさに、阿部先生がおっしゃる「委ねる」ですね。生徒に任せて、やらせてみて、結果はすべて受け入れる。失敗してもOK。長く、「転ばぬ先の杖」が教員の役割だと思われてきましたが、それは違うんですよね。失敗する前に手を差し伸べるのではなくて、生徒に実際に体験させて気づかせる。失敗から学ばせる。まあ、言うは易しで、実際は自分の中の不安との闘いですけどね。

石井：すごく共感できます。心が動く仕掛けをするためにも、適切なタイミングやバランスで声かけをするためにも、やっぱり生徒一人ひとりをよく知ることが欠かせないので、人と人としての

教員　前川 修一 先生
福岡県立ありあけ新世高等学校 定時制課程

コーディネーター　石井 香名 さん
島根県立隠岐島前高等学校

養護教諭　阿部 千穂 先生
山形県立寒河江高等学校

教員 徳田 憲一郎 先生
私立 長崎南山中学・高等学校

関係性を築いたうえで伴走することを大事にしています。

あとは、探究が机上の空論にならないような働きかけも意識しています。「あなたが地域の課題だと思っていることが本当に課題かどうかは、実際に見聞きしないとわからないよ」と。肌感覚を大事にしてほしいので、地域の人とつないで場を設定するようにしています。

徳田：大事にしているのは「生徒がどうありたいか」ということです。探究で大事なのは成果ではなくプロセスだと考えていて、どこで心が動いてどうやって伸びたか、スタート時からの個々の内面の変化や成長を見るようにしています。

加えて、それを生徒自身に認知してもらうために、振り返りやフィードバックに力を入れています。

一方で難しいのが、生徒の心の動きや内面の変化を見抜くことです。パッと表情が変わることもあれば、黙ってうつむいているけど意外と心は大きく動いていることもあって、それを伴走者がいかに見取れるかが課題です。

前川：目に見えて変わる部分もあれば、表面的にはわからないことや、時間が経ってから効いてくることもありますからね。何か意識されていることはありますか？

徳田：生徒と対話を重ねてどういうふうに感じているかを引き出したり、生徒の内面の見取りに重点を置いた研究授業を行ったりと、教員同士で工夫して取り組んでいますが、まだまだです。

石井：心が動いた瞬間をできるだけ見逃さないためにも、生徒に関わる大人たちの連携プレーが大事だと思います。見たこと聞いたことの共有が自然とできる仕組みや文化が学校の中にあるといいですよね。一人では抱えきれないので。

福岡県立ありあけ新世高等学校 定時制課程の探究

「自分事」の課題を、自分の言葉で語る

2023年度に閉課程を迎えた定時制高校。総合的な探究の時間は1～4年まで週1時間。授業では自己関心マンダラート、読書シート、KJ法、KP法など考えるための手法を取り入れつつ、仕事中に気づいた探究課題や自分の興味・関心事について深め、年度末には高校・大学の教員や経営者など外部の審査員の前で発表しコメントをもらう。前川先生は教科を含めた学習活動全体を通し、生徒が自信を持ち自分の言葉で語れる場をつくっている。

伴走者として悩んでいることは？

阿部：生徒が探究するなかで壁にぶつかったときに、自分にはどういう支援ができるか、押すべきか引くべきか見守るべきか、そのあたりはいつも悩みます。

背中を押すべきタイミングもあると思うんですが、押しすぎても強制になってしまうし…。その子の性格やそのときの状況によっても変わってきますし、判断が難しいなと思います。

石井：わかります。さじ加減が難しいですよね。阿部先生の保健室探究活動のように、生徒が自分のタイミングや状況に合わせて踏み出せるのはすごくうらやましいです。本来はそうあるべきなんですが、授業の中でやっていると、ある程度足並みを揃えないといけなくて。

例えば、今年度の1年生は、まずは地域に放り出してみようということで、レクチャーもそこそこに何日か地域の事業所で体験をさせたんです。それが良かったという生徒もいれば、地域を知るきっかけにはなったけど何をしたらいいかわからないまま終わったという生徒もいました。

一方、価値観やWILLの深掘りからスタートすると、それが苦手で手が止まってしまう生徒や、自分の価値観は見えてきたけどそれを地域課題につなげるのが難しくて立ち止まってしまう生徒もいます。

また、自分でやりたいことじゃないとやる気にならない子もいれば、与えられたミッションに従って動いているうちに自分なりに課題や意義を見つけられる子もいます。どのやり方も、全員には当てはまらないんですよね。授業という枠組みでやる中でそこをいかに乗り越えるかが、課題です。

島根県立隠岐島前（おきどうぜん）高等学校の探究

週1日、丸ごと地域実践の日

県立高校でありながら、生徒の通う隠岐島前地域（海士町・西ノ島町・知夫村）と一体となって教育魅力化に取り組むパイオニア校。2023年度の2年次生から普通科の新しい形である地域共創科をスタート。学校設定科目「地域未来共創」では週1日（6単位）を「地域共創デー」として丸ごと地域実践にあてている。コーディネーターの石井さんは、高校専任になる以前は公立塾である隠岐國学習センタースタッフとして生徒の探究に伴走してきた。

徳田：そう、セオリーがないんですよね。外部とのつながりという点では、企業や社会と関わる接点をいかにつくるかが本校の課題ですね。

「全国高校生マイプロジェクトアワード」に参加した際に、高校生がいろんな企業の方からフィードバックをもらっているのを見て、こういう場をもっとつくりたいと思ったんです。ただ、うちにはコーディネーターはいないので、教員のマンパワーで動かすしかなくて。そこをクリアしていきたいです。

あとは、「問い」づくりですね。生徒から何か引き出そうと問いかけてもなかなかうまくいかないことがあって、悩ましいですね。

前川：セオリーはない。目の前の生徒に合わせるしかないですね。探究はメソッドありきではなく、生徒の息に合わせること、生徒が内在的にもっているものを引き出し学びの楽しさと結びつけることが大事だと思って、これまで取り組んできました。

一方で、本当にこれでいいのか、もっと科学的、学術的な手法で考察や分析を行う探究にすべきなんじゃないかという迷いもあります。あるんですが、そういう探究は他に任せればいい、型を決めることで生徒が自ら何かやろうとする心の動きにストップをかけたくない、今はそう思っています。

今後、挑戦したいことは？

石井：最近は、生徒の伴走者である地域の方にいかに伴走するか、どうしたら一緒に伴走力を高めていけるかを考えるようになりました。新しく赴任してくる先生にいかに伴走力をつけてもらうかも含めて、今後は伴走者への伴走にも注力していきたいなと思っています。

徳田：パターン化はしたくないのですが、生徒の探究を見ていると、大きく分けて3つ、興味のあるテーマに基礎研究的に取り組むケース、アントレプレナーシップ的なアプローチをするケース、自分のやりたいことを実現するマイプロジェクト的なケースがあるなと感じています。

昨今はＳＴＥＡＭ教育や起業家教育などいろんな実践事例が出てきているので、そうした要素を組み合わせて、生徒に合わせてコーディネートできないかと構想しています。具体的には、それぞれに特化したゼミを設けたいと思っています。

阿部：生徒の新しい芽を見逃さないようにして、もっと地域のいろんな人とつなげていきたいですね。例えば、総合的な探究の時間で、地域おこし協力隊の方を伴走者として巻き込もうという動きがあるので、保健室探究活動でもそういう個性豊かな方々と生徒のマッチングができたらいいなと思っています。

また、校内に「寒高（かんこう）カフェ」という地域の方との交流の場を作っているので、そこを生徒の探究のフィールドとしてより活用することにも取り組みたいです。

前川：本校の定時制課程は２０２３年度で閉課程になり、私は次にどこで教鞭をとるか決まっていませんが、どこであっても今のスタイルは変えないと思います。

確信をもてるようになったのは、課題を自分事として突き詰め、自分の言葉で語ることで大きく変わった定時制の生徒の姿を目の当たりにしたから。教えられているのは私たち教員です。これからも生徒に寄り添い、生徒が自ら動き出そうとしたときに陰ながら支える存在でいたいと思います。

4校の探究の詳細レポートをWebサイト「伴走者のための共学共創コミュニティ」に掲載しています。

山形県立寒河江（さがえ）高等学校の探究

養護教諭が取り組む新しい生徒支援

大半の生徒が大学進学をする地域の伝統校。教育課程に位置付けられた総合的な探究の時間とは別に、養護教諭である阿部先生が取り組む新しい保健室支援の手段としての探究活動がある。保健室が居場所になっている生徒に寄り添い、カリキュラム外での生徒のマイプロジェクト（放課後探究）に伴走しているのだ。また、学校の空きスペースを活用し、地域の人と交流ができる“寒高カフェ”を不定期開催し、多様な人と出会う機会もプロデュースしている。

私立 長崎南山高等学校の探究

発表会は全て「プロセス発表」

カトリックミッションの中高一貫校。新課程に先駆けて2019年度より総合的な探究の時間を開講してきた。2年次は「数理科学」「国際」「地域」などのゼミに分かれ、学校外と繋がる活動を重視している。徳田先生は「どのような成果を出したかではなく、その過程を通して何を学び、どのような力を身につけたか、そして、その後にどうつなげていけるかが大事」と考えており、探究の中間・最終発表会はすべて「プロセス発表会」としている。

16の場面集

A collection of inquiry learning scenes that drive the engine of the mind.

全国の高校で、生徒達に寄り添う伴走者達の現場の声と高校生の声を、場面集として紹介します。それぞれの地域によって様々なハードルがありますが、創意工夫しながらその問題に向き合っています。ハードルを超えた先に生徒達の心に火が灯る瞬間、生徒だけではなく、地域の人々や伴走者達の心にも新たなエンジンの鼓動が聞こえてきます。

場面集の見方

どんな状況だったか?

どんな伴走をしたのか?

SITUATION

場面集 01

スタート時

これから探究を始めるところ

岩手県立 種市高等学校

何をしたいのかわからない

地域の人との対話から探究活動をスタート

探究の初めにまずは地域を知る対話の場を設けた。大人1人に対して生徒3〜5人程度、自分の仕事や地域での活動紹介から始まり質疑応答。その後は定期的に来校いただき一緒に地域に必要なことを考え、後輩にプレゼンするまで伴走してもらった。生徒自身の中にあった課題意識が現実とつながり、地域を見る目が変わった。

伴走のコツを一言で

学校の外と繋げ視野が広がる瞬間をつくる

伴走のコツ

伴走者の声 Mentors Voice

一般社団法人moova 代表理事 眞下 美紀子

勉強ばかりだった高校生時代。将来のことを考える時に地域の仕事や人のことを全然知らなくて良いのかという問題意識を持ちました。地元にUターンして事業の傍ら高校のコーディネーターをしていますが、地域側にとっても高校生と繋がることには意味があると思います。思いを持ってすごい活動をしている人たちは実はたくさんいます。まずはその人たち、その人たちにある地域の魅力を知るだけで学びになるし、高校生との思いがリンクして一緒にやっていこう、と前に進むこともあります。

伴走者のやりがい・心の駆動

生徒の声 Student Voice

「仲間」を見つけ自分もやらなきゃ!に

地域の問題に対して周りの大人は何もしていないと思っていました。でも、頑張っている大人たちとの接点ができ、仲間ができた!という感覚を持ちました。「役場がやってくれない」とか「大人がダメだ」とか人のせいにばかりしてはいけない。自分たちにもできることがあるし、何かやらなきゃいけない、と考えが変わりました。

岩手県立種市高等学校　卒業生 Y.Rさん

高校生の声

SITUATION
場面集
01
スタート時

岩手県立 種市高等学校

これから探究を始めるところ

地域の人との対話から探究活動をスタート

探究の初めにまずは地域を知る対話の場を設けた。大人1人に対して生徒3〜5人程度、自分の仕事や地域での活動紹介から始まり質疑応答。その後は定期的に来校いただき一緒に地域に必要なことを考え、後輩にプレゼンするまで伴走してもらった。生徒自身の中にあった課題意識が現実とつながり、地域を見る目が変わった。

学校の外と繋げ視野が広がる瞬間をつくる　伴走のコツ

伴走者の声
Mentors Voice

一般社団法人moova 代表理事 眞下 美紀子

勉強ばかりだった高校生時代。将来のことを考える時に地域の仕事や人のことを全然知らなくて良いのかという問題意識を持ちました。地元にUターンして事業の傍ら高校のコーディネーターをしていますが、地域側にとっても高校生と繋がることには意味があると思います。思いを持ってすごい活動をしている人たちは実はたくさんいます。まずはその人たち、そのベースにある地域の魅力を知るだけで学びになるし、高校生と大人の思いがリンクして一緒にやろう、と前に進むこともあります。

生徒の声
Student Voice

「仲間」を見つけ自分もやらなきゃ!に

地域の問題に対して周りの大人は何もしていないと思っていました。でも、頑張っている大人たちとの接点ができ、仲間ができた!という感覚を持ちました。「役場がやってくれない」とか「大人がダメだ」とか人のせいにばかりしてはいけない。自分たちにもできることがあるし、何かやらなきゃいけない、と考えが変わりました。

岩手県立種市高等学校　卒業生 Y.Rさん

SITUATION
場面集
02
活動の終盤

島根県立 松江北高等学校

イベント参加を探究のタネ探しに

体験をふりかえり、探究テーマ発見に繋げる

比較的受動的な出前授業やイベント参加を探究に繋げたいと考え、参加後にリフレクションの時間を設けた。出前授業で学んだことと、生徒の興味関心や普段学んでいることとの繋がりを意識できることがポイントであると考え、リフレクションのワークを工夫。学んだことを共有することも有効と感じている。

リフレクションの時間をしっかり設ける　伴走のコツ

伴走者の声
Mentors Voice

島根県 教育庁 高大連携推進員 吉崎 聡一

単に活動するだけではなく、活動に対してしっかり振り返ることが、生徒の成長につながっていると感じています。リフレクションはいくつかのステップに分けて行った方が、より深まります。具体的には、振り返るエピソードを書き出すステップ、エピソードを価値づけするステップ、普遍的な学びを見つけるステップ、今後に生かす方法を検討するステップなどなど。リフレクションをする中で、生徒が自分の学びを認識して成長できる姿を見るのがやりがいです。

生徒の声
Student Voice

振り返りと共有により気づきが生まれた

島根県立大学にあるおはなしレストランで、絵本の読み聞かせについて大学生から学び、自分たちでもやってみました。子ども達は文字よりも絵を見るのでゆっくり読むことなど、高校生同士アドバイスしあう中でも発見がありました。いろいろな人と一緒に活動し振り返ることで、細かい気づきが得られることもわかりました。

島根県立松江北高等学校　生徒 E.Mさん

SITUATION
場面集
03
スタート時

福岡県立ありあけ新世高等学校　定時制課程

探究テーマが決まらない

アルバイト経験から探究のタネを発見

テーマが全く決まらない生徒に「何か言いたいことない?」と聞くと「ない」。普段アルバイトで唐揚げ屋を1人で切り盛りする彼に、仕事のポイントを聞き、それがいかに素晴らしいかを伝えながら「何度で揚げればおいしくなるの?」と発問。「それならできるかも」とテーマが決まった。

生徒の「今」を認める対話　伴走のコツ

伴走者の声
Mentors Voice

福岡県立ありあけ新世高等学校
定時制課程 主幹教諭 教務主任
前川　修一

「東京大学の先生に審査員をお願いします」と聞いて目の色が変わった生徒たち。しかし、それでもテーマが決まらない、何をしたらいいかわからないという生徒もいます。そんな時はナラティブアプローチに切り替えます。「あなた自身を語ればよい。あなたの経験はあなたにしかない」。コミュニケーションに苦手意識を持っていたり、自分に自信が持てない生徒であっても、誰かに何かを伝えたいという気持ちは必ずあることを、定時制高校での経験上知っていたからです。

生徒の声
Student Voice

聞いてもらう意味があるテーマだと思えた

唐揚げ店でのアルバイトの話はネタとしてはつまらなく、発表するものじゃないと思っていた。先生から言われて、考えが変わった。発表のテーマが自由なことと、定時制の仲間が笑うことなく聞いてくれるので、安心して発表することができたのが大きい。クラスのみんなが真剣に取り組む姿も、モチベーションにつながった。

福岡県立ありあけ新世高等学校 定時制課程　生徒 K.Tさん

SITUATION
場面集
04
スタート時

私立長崎南山高等学校

テーマはあるが、問いが定まらない

食糧難について自分でできるアクションを起こす

将来の夢は理学療法士、探究課題は食糧難という、生徒自身も違和感を感じる中で、食糧難の現状を知りたいとJICA長崎へのインタビューを実施。そこから自走し、SDGsアクションプランコンテストで最優秀賞を獲った。現在は、探究学習で行った食糧難の解決に向けて、農学部にて発展途上国の食糧難問題にアプローチしている。

生徒と教員ではなく、人と人として対等に向き合う　伴走のコツ

伴走者の声
Mentors Voice

私立長崎南山高等学校
総合的な探究の時間委員会 委員長
徳田　憲一郎

生徒自身に無限の可能性を感じている。私は、疑問に思ったことを問いかけ、生徒自身が繋がりたい人や繋がったら広がるだろうという人と、コネクションがなくても連絡して「つなぐ」ことを意識した。学校の外との繋がりができたことで、社会をより一層身近に感じ、本気で解決したいという、覚悟と使命感を醸成できると感じている。意志と自分らしさ(WILL)を軸にして教師である私自身の理解を超えて行動していく姿は、探究の先にある目指したい生徒像である。

生徒の声
Student Voice

リアルな話を聞いたことで考えが変化

食糧難をテーマに探究を進める中で、JICAの方に話を聞く機会をいただいた。日本では感じられない海外の現状を知り、自分の考えが変化したことを覚えています。また、JICA主催のアクションプランコンテストで他県の学生の様々な発表を聞き、環境問題に対する意識が高くなり、将来的に関わっていきたいという使命感になりました。

私立長崎南山高等学校　卒業生 H.Yさん

SITUATION
場面集
05
スタート時

島根県立隠岐島前高等学校

何に対しても面倒がり口癖は「わかんない」

都会でのインターンシップに挑戦

毎週、面談の機会があったが、最初は何を質問しても返ってくるのは「わかんない」といった短い言葉。好きな〇〇トップ3を毎週発表しあい、「いつから?」「なぜ?」と問いをぶつけ、たくさん言葉を交わす工夫を重ねた結果、次第に自分から話をしてくれるようになった。ここぞ、というタイミングで1週間の探究プログラムを勧めたら参加が決定。

とにかくたくさん言葉を交わす　伴走のコツ

伴走者の声
Mentors Voice

島根県立隠岐島前高等学校
魅力化コーディネーター
石井　香名

考えていること、感じていることを言葉にする練習を積むことで、自己理解が進み、肯定感も高まるのではないかと考えました。面談で心がけていたのは、ポジティブな話題で楽しく会話することや、彼自身の興味関心や価値観を私自身が面白がることです。生徒は、探究プログラムでの挑戦や新たな出会いによって自信がつき、表情も明るくなったように感じます。二年間を通して、徐々に自己評価の軸が、他者から自分自身のなかに移行しているようです。

生徒の声
Student Voice

話すことで自分を知り、一歩踏み出せた

入学当時は他人の目が気になって、どんな質問にも「わからない」と答えていました。でも面談は意外と楽しく、自分のことを知るきっかけになり、だんだん人目を気にしなくなりました。都会で働くプログラムに挑戦したことで、経験することの大切さを知りました。今は、なんでも「とりあえずやってみよう」と思っています。

島根県立隠岐島前高等学校　生徒 T.Mさん

SITUATION
場面集
06
活動の途中

山形県立寒河江高等学校

やることが多くいっぱいいっぱいになっている

自身の経験を元に、若年者に献血を広げる

テーマが見つかり、アンケート作成や企業への電話依頼など動き始めたが、定期試験や課題など日々やるべきことが多く、思うようにうまくいかない。「両立が難しい」とプロジェクトへの心が折れかけた。期日があることで焦りが見え隠れしたが、あえて全然関係のない雑談をするなど息の抜ける場面を設け、待っていたら再スタートできた。

息の抜ける時間をつくる　伴走のコツ

伴走者の声
Mentors Voice

山形県立寒河江高等学校
養護教諭
阿部　千穂

初めてのことに挑戦するとき、思うようにうまくいかないことがあると、日々のやるべきことに追われて心が折れかけるのは大人でもよくあること。生徒の表情や向かう姿勢、普段の様子をみて、疲れや焦りを察知した時は全く関係のない面白い話や趣味の話を聞いたり、何もしない日を設定したりして意識的に緩くかかわった。事前に「こういうことに悩み、ぶつかることもあると思うけど、きっとあなたなら乗り越えられるよ」と声をかけておくこともいいかもしれない。信じる気持ちを大人も持つ。

生徒の声
Student Voice

活動した人にしか経験できない学びがある

探究活動を始めてから普段の授業では学ぶことができないものがあると感じた。それは人それぞれ違った形で表れ、タイミングも異なる。だが、共通して言えるのは活動した人しか経験できないということ。私自身は大人への先入観の壁を溶かし、仲間として活動できた。自分の探究心に素直に生きることが大切だと思うようになった。

山形県立寒河江高等学校　生徒 M.Mさん

SITUATION
場面集
07
活動の途中

島根県立隠岐島前高等学校

自分の世界はあるけど外への発信は苦手

1日限りの作品展示を行う「芸術祭」運営

絵や写真で表現することが好きではあるものの、活躍の場が少なく、進んで前に出ようとはしてこなかった生徒たち。初回の芸術祭運営では、伴走者がやり方を教え一緒に作り上げていったが、2回目の実施が決まった時には「自分たちが中心になって動くので、見守ってください」と言うまでに積極的になった。

待つだけでなく、やり方を示して引っ張る

伴走のコツ

伴走者の声
Mentors Voice

島根県立隠岐島前高等学校
魅力化コーディネーター
石井　香名

「失敗が見えているが、待つべきか」「知識やスキルを積極的に伝え、より良い成果につなげるべきか」伴走のあり方に悩んできました。そこで実験的に伴走のあり方を振り切ってみたのが、この芸術祭。第一回は、会議の進行やタスク・スケジュール管理など、私がリーダーとして手本を見せる、背中を見せて「ついてこい」形式。それを踏まえた二回目は、進んでリーダーを引き受けてくれた生徒が、体得したスキルを発揮し芸術祭を創りあげました。

生徒の声
Student Voice

2回目を提案し自らリーダーに

これまでは「向いてない」と思い、リーダーになるのを避けていました。でも、初回の芸術祭が楽しく「もう一度やりたい!」と強く思ったため、第2回の実施を提案。思い切ってリーダーに名乗りを上げました。苦戦する場面もありましたが、都度やり方を変え、多くのメンバーを巻き込めた芸術祭は自信につながりました。

島根県立隠岐島前高等学校　生徒 Y.Mさん

SITUATION
場面集
08
活動の途中

山形県立寒河江高等学校

活動がうまくいかずモチベーション低下中

女性特有の人間関係のドロドロを何とかしたい

中学時の経験から思い入れのある探究テーマ。アンケート先を開拓し、内容を考えるも問い立てが難しく停滞感が。伴走者の私もどう関わるか悩み、保健主事や学年主任、学校外のサポーターに相談。すると、その先生方が学年便りや集会で紹介してくれたり、陰ながら肯定したりほめてくれるなど生徒に働きかけてくれ、生徒も前向きに!

伴走者も学校内外に伴走者を持つ

伴走のコツ

伴走者の声
Mentors Voice

山形県立寒河江高等学校
養護教諭
阿部　千穂

伴走者自身も探究で生徒の心が揺れ動く時、どう関わろうか?自分ができることは何か悩むことが良くある。教員だって人間だからしょうがない。どれが正解だなんて決められない。そんな時、先輩教員や地域の方が私の気持ちを受け止めてくれ、「プロジェクトをやろうとしたこと自体が尊いこと」そんなあたり前のことを気付かせてくれた。いま一番大切にしたいことは何なのか、私自身も立ち戻れた。伴走者は一生探究。もやもやを見逃さない。本物の心のエンジンはきっとまた動き出すはず。

生徒の声
Student Voice

壁を乗り越える過程での気づきが次へのヒントに

活動を進めていく度に何度も壁にぶつかりましたが、それを乗り越えて、今の自分の目指したい未来や大切にしたい軸に立ち戻ることができました。また、周りの方々の支えによって感謝の気持ちを実感。もしかして、これがキーワードかも!?これからは実際に人間関係に悩みを抱える中学生に会って話を聞いて、より本質に近づく問いを作りたいです!

山形県立寒河江高等学校　生徒 G.Rさん

SITUATION
場面集
09
活動の途中

群馬県立 吉井高等学校

学校外でどう行動すればよいかわからない

企業の課題を解決するアイデアを模索

地域の大人と話す機会が多いとは思えない生徒たちは、初対面ではとても緊張し声も小さく表情も硬かった。誰の言葉にも意味があることを伝え、生徒の話をしっかりと聞くこと受け止めることで、安心して話せる場をつくることを心がけた。

伴走のコツ　居心地よくいられる場、話せる場を!

伴走者の声
Mentors Voice

有限会社いりやま　代表
（群馬県立吉井高等学校　協力企業）
入山　寛之

みんなちがってみんないい！最初はみんなガチガチで「ちゃんとしたことを言わなくては」という顔でした。でも少しずつ自分の思っていることが言えるようになると、人と違う意見を言うことが恥ずかしいことではないという雰囲気が出てきました。そして、まとめ役で輝く生徒、記録係としてとても優秀な生徒、笑顔でイベントを盛り上げる生徒、それぞれの個性を発揮してとても充実した顔を見られたことが伴走してきて本当に幸せなことでした。

生徒の声
Student Voice

本当の「チーム」になり、行動できるようになった

企業とのこまめな連絡、イベントの広報など、やらなければならないことがあるのはわかっているのに、どう行動すればよいかわからず行き詰まりを感じていました。企業の社長さんの言葉や行動に後押しされ、チーム全体で前向きに行動することができました。

群馬県立吉井高等学校　生徒 A.Mさん／R.Tさん 他6名

SITUATION
場面集
10
活動の途中

島根県立 松江南高等学校

やりたいことはあるが実現可能かわからない

食品の美容効果を科学的に分析

食品から化粧品を作りたいと探究を始めたグループ、現実的に化粧品製造までは難しいとわかり、食品の美容効果を分析することになった。しかし伴走者アドバイザーは"文系"、実験等の指導には限界がある。そこで生徒と一緒に問題点を整理し、ポイントを絞って化学や生物の先生方に助言を請うようにアドバイスした。

伴走のコツ　できることと、できないことの切り分けを

伴走者の声
Mentors Voice

島根県立松江南高等学校
主幹教諭
桑田　直子

文理問わず研究の基礎となる考え方には共通の点があると信じ、先行研究を調べること、何をどこまでできそうか現実的に考えることなどを助言。自分でも論文を読んだり、それを生徒に紹介したりして、理科室の実験でできそうなことを一緒に考えましたが、私の知見には限界があります。実験については理科の先生方に質問するよう助言すると生徒は喜んで、積極的に教えを請いに行っていました。門外漢でも、ファシリテーターやつなぎ役として伴走をすることが可能だと思います。

生徒の声
Student Voice

理科の先生にも相談するよう促され、実験ができた

理科の先生にもアドバイスがいただけると聞いて、とても嬉しかったです。本当は色々な実験をしてみたかったのですが、何がどこまでできるのかわかりませんでした。理科の先生から、高校で実験できるレベル、溶液、測定方法など、具体的なご助言をいただいて、何度か実験を行うことができました。

島根県立松江南高等学校　生徒 M.Mさん

SITUATION
場面集
11
活動の途中

私立 長崎南山高等学校

アイデアはあるが不安で行動に移せない

商店街活性化のためオリジナル商品を開発

商店街のパン屋さんとコラボし、イベントで販売する商品を作るアイデアがまとまったが、高校生が頼んでいいことなのか、断られないか…と不安で動き出せなかった。ゼミ担当だった徳田先生に相談したところ、「いいんじゃない？ やってみたら？」と言ってくれたので思い切って依頼に行くことができ商品化が実現した。

生徒の不安を理解して、背中を押す

伴走のコツ

伴走者の声
Mentors Voice

私立長崎南山高等学校
総合的な探究の時間委員会 委員長
徳田 憲一郎

生徒自身のどうありたいか（WILL）がとても重要であると感じている。どうありたいかを生徒自身が認知することで、授業だけでなく、あらゆるものが探究的になるように感じる。その上で、私は、生徒自身の試行錯誤や工夫のプロセスを見取り、一人ひとりに問いかけ、引き出していくことを意識して伴走している。特に、教師側も「わからない」を楽しんで、生徒と一緒にアイデアを吟味したり、議論してみたりと、「一緒に探究している感覚」は大事にしている。

生徒の声
Student Voice

動いてみたら協力してくれる人に出会えた

今でこそ地域でのイベント開催など、いろんなことができるようになりましたが、最初は不安だらけ。アイデアを考えるのは盛り上がるけど行動に移すことができず行き詰まっていた時、先生の言葉に背中を押され、動いてみたら協力してくれる人たちと知り合えました。何事にもチャレンジしてみようと思えるようになりました。

私立長崎南山高等学校　生徒 S.Kさん

SITUATION
場面集
12
スタート時

岩手県立 種市高等学校

興味関心はあるが、探究の方法がわからない

地域の若者が海洋ゴミ問題にアクションを起こす

以前は「自分だけ」の関心事であったが先生やコーディネーター、他地域の高校生からアドバイスを聞くことで、「周囲を巻き込む」ことを意識しはじめた。学校内でビーチクリーン活動参加を呼びかけ月に1度実行。積極性のある生徒であったため、接点のありそうな人や取り組みを紹介し繋げる事で、活動を実現させたり、視野が広まるように働きかけた。

大事にしたいことを聞いた上で選択肢を示す

伴走のコツ

伴走者の声
Mentors Voice

一般社団法人moova
代表理事
眞下 美紀子

コーディネーター3年目で、それまでの反省も踏まえ、何かやったという実（じつ）や達成感が大事だと思うようになっていました。やりたいことや大事にしていることが何か、対話しながら、だったらこんなこともできるのでは？と例示した中から彼女が選択したのがビーチクリーン。活動する海の前で他校生に発表した時には、美しい海に驚く姿を見て地域の魅力に改めて気づき、活動の意義も実感したようです。外と繋がることで高校生の視野は確実に広がると思います。

生徒の声
Student Voice

地域で活動して選択肢が広がった

海洋ゴミ問題に関心がある私に、眞下さんが関わるビーチクリーン活動を教えくれました。高校生が中心になって行動できるようにしたい、と学校で呼びかけたところ参加者が増え今も続いています。元々、公務員になって地域を良くしたいと考えていましたが、他の方法も個人としてできることもあると、将来の選択肢が広がりました。

岩手県立種市高等学校　卒業生 H.Nさん

SITUATION
場面集
13
活動の途中

島根県立 松江南高等学校

何から手を付ければよいかわからない

最先端のIT技術を地域に広める

新しい技術について探究を始めたが情報が少なく、やる気はあっても何をすればよいかわからない状況に。図書館の力を借りて関連文献を入手し、担当分野を決めて読んだところ全体の知識が底上げされ、次にすべきことが見えた。全国で活躍する専門家にコンタクトをとり、イベント企画・開催やビジネスプランの作成にこぎつけた。

まずは、知識をつけることから　伴走のコツ

伴走者の声
Mentors Voice

島根県立松江南高等学校
主幹教諭
桑田　直子

最初は私も含めて、「はてなマーク」が頭上を飛び交うような滑り出しでした。しかし「まずは知識をつける」と方向を定めてからは、生徒たちはどんどん自分たちで調べて理解を深めていきました。探究は読んで字のごとく「深く探って究めること」です。何かに興味を持ったら、まずは対象をよく知り、周辺分野も含めてしっかりとした知識を持つことが、課題設定への第一歩になるのではないでしょうか。

生徒の声
Student Voice

何冊も本を読み課題が見えて方向転換できた

テーマについて何冊も本を読むうちに、データを集めて分析することが難しい分野だと分かりました。そこで探究の目的を「この技術を地域の大人に広める」に変更し、イベントの企画・実行とビジネスプランの作成を行いました。自分たちで調べたからこそ、難しい分野でも理解しながら探究計画を立てることができたと思います。

島根県立松江南高等学校　生徒 T.Hさん

SITUATION
場面集
14
活動の途中

島根県立 松江東高等学校

何から始めたらいいかわからない

子ども向けアートイベントを企画運営

イベントを企画するには、考えなくてはいけないこと、準備しなくてはいけないことが山のようにある。しかし、初めてイベントを企画する高校生が全てを予想するのはなかなか困難なため、走りながらその都度考えて準備できるように、活動を早く始めるように声かけを心がけた。

まずは、小さく試してみる　伴走のコツ

伴走者の声
Mentors Voice

島根県 教育庁
高大連携推進員
吉崎　聡一

失敗しないようにするには入念な準備が必要です。でも、経験値がまだまだ乏しい高校生にとっては、十分に準備をすること自体がなかなか難しいです。早くたくさん行動して、失敗を重ね、そこから学んでいく方が実は近道。実際のイベントに先立ち、まずは身内で試してみたときに、用意しなくてはいけないモノやこの説明だと分かりにくいなど、たくさんの発見がありました。経験値不足を補うには、たくさん行動するのが大事ですね。小さく試せば、それほど手間もかかりません。

生徒の声
Student Voice

実行してみることの大切さを知った

イベントを企画して改めて絵を描くのは楽しいことや、みんなが熱中して描いている姿を見てるとこちらも嬉しくなることに気がつきました。イベントを行って、実行してみることの大切さを知りました。そして、課題もたくさん知りました。なので、課題点を改善することで、次回はさらにより良いイベントにできると思います。

島根県立松江東高等学校　生徒K.Rさん

SITUATION
場面集
15
活動の途中

群馬県立 吉井高等学校

どこを目指しているかわからない

企業の課題を解決するアイデアを模索

企業が抱える「従業員が喜びを感じるためにできることは」という正解のない課題に対して、何から手を付けていいかわからず、もがきながら進んでいる生徒。模索しながら定めた方向性に向かって進む生徒を後押しできるような声かけを心がけた。

褒めるタイミング、疑問を投げるタイミング

伴走のコツ

伴走者の声
Mentors Voice

群馬県立吉井高等学校
教務主任
小林 良典

「他者のために」は探究のモチベーションになりますが、自由な発想を生み出したり、一歩アクションを踏み出したりするときには相当の勇気が必要となります。ちょっと背中を押してあげることで生徒は一歩を踏み出し、自走を始めるのだとわかりました。アクションを始めた生徒は課題を自分事化し、探究が「自分のために」あったのだと気づくのです。生徒の葛藤と成長を目の当たりにできたことをたいへん嬉しく思います。

生徒の声
Student Voice

暗中模索の中、言葉が行き先を照らしてくれた

実践したいことはたくさんあるのに行動に繋がらず、探究は滞るばかりでした。暗中模索を繰り返しているうちに、仲間や企業の方々の存在が大きくなっていきました。たくさんの方がくださった言葉で成長することができました。

群馬県立吉井高等学校　生徒 S.Aさん

SITUATION
場面集
16
活動の終盤

福岡県立 ありあけ新世高等学校 定時制課程

発表準備が全く進んでいない

最後まで自分と向き合い、伝えたいことを吟味

発表会に向けてのエンジンがかからず、前日になっても、スライドが2、3枚で止まっている生徒が大半。しかし、ここで口出しをしては主体性を奪うことになると、待ちに徹した。当日の昼、アルバイト先の更衣室で仕上げた生徒もいたが、結果は、自分にしか言えないことを、自分らしく表現。どの発表も審査員をうならせた。

苦しくても手を出さずただ待つ

伴走のコツ

伴走者の声
Mentors Voice

福岡県立ありあけ新世高等学校
定時制課程 主幹教諭 教務主任
前川 修一

お釈迦様の掌で暴れる孫悟空のごとく、あたかも生徒たち自身がやりおおせたという感覚が残れば最高。褒めることを基調にした審査講評の依頼など、見えないガードレールの設定に努め、あとは見て見ぬふり。ひたすら生徒を信じて待つのみです。日頃からの生徒たちとの関わりが、彼らの長所、強味、人間性の把握につながり、当日きちんと発表できるのかという不安があっても、最後は信じることができます。日頃の関係性が、ここぞというときにものをいうことを痛感します。

生徒の声
Student Voice

自分らしい発表をしたくて一から作り直した

作り直そうと決めた瞬間の理由は、単に「気に入らなかった」からです。書き終える終盤になんだかムカムカして、その不快感に耐えられなくて新しいものを作りました。誰かの期待を望んだような、けれど誰の記憶にも残らない、そんなものを作りたくなかったのだと今は分かります。でも当時は衝動から書き直しました。

福岡県立ありあけ新世高等学校 定時制課程　生徒 A.Kさん